



TITLE:

第55回岐阜外科集談会

AUTHOR(S):

CITATION:

第55回岐阜外科集談会. 日本外科宝函 1970, 39(3): 190-192

ISSUE DATE:

1970-07-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/207876>

RIGHT:

第55回岐阜外科集談会

日時：昭和45年2月4日午後5時30分

場所：岐阜大学医学部丹羽講堂

1. 硬膜下血腫の手術効果についての臨床的
試み

岐阜大2外科

檜木良友 松井順五
森元光昭 坂田一記

慢性硬膜下血腫に対する手術手技として、血腫直上の頭蓋に1乃至数個の小穿頭孔を穿け血腫を除去する方法がある。然しこの手技に於いては血腫囊が放置されるため、従来脳外科で用いる銀クリップを脳表にかけけることは、水腫の発生又は血腫再発の可能性がある。我々はこの術式を用いる場合銀粉末片を一小穿頭孔直下の脳表に局所的に散布しておき、術後この部を切線方向にX線撮影を行い、金属像と頭蓋骨との間隔を経時的に追求し術後効果の判定に役立てている。

一方、硬膜下血腫等の頭蓋内疾患に超音波を応用し、搏動する正中線エコーの連続記録法により頭蓋内圧及び脳循環状態を推定し得る可能性を示した。即ち、エコー曲線の Rise-time は頭蓋内圧の検索に用い、また心電図の R-peak よりエコー曲線の立上り迄の時間、外頸動脈波の立上りからエコー曲線の立上り迄の時間はそれぞれ脳循環状態の検索に用いられる可能性を症例で示した。

2. 脳内血腫と考えた脳膿瘍の1例

県立岐阜病院外科

須原邦和 本多雅昭
同 臨床病理

高橋親彦

28才の男子、肺結核にて他院に入院中で軽快していたが、初期感染等の不明のまま、急に高熱をもって発症した脳膿瘍の症例を報告した。弛張熱開始後5日目に片麻痺を来し、その後下熱したが、片麻痺増強、言語障害発来し、本院に紹介された。白血球数：初期8,000来院時14,000髄液は圧上昇のみで細胞数の増加なく、脳波は全般徐波、殊に右半球著明、右頸動脈による脳血管写にて、前脳動脈の右→左への偏位と、線状体動脈の内方凸の逆彎曲を認めた。脳内血腫と考え、

開頭血腫除去を試みたが、血腫、膿瘍、腫瘍に遭遇せず、術後3日目に死亡した。剖検にて、両半球に大小5ヶの脳膿瘍を認めた。比較的大きい2つの膿瘍は右半球にあり、手術創はこの両者の中間部に進入していた。本例は初期に白血球の増加少く、髄液に細胞数の増加の無かった比較的変則的な経過をとった症例であった。

4. 酸素気脳法による外傷性低髄液圧症治療
の試み

揖斐病院外科

大前勝正 星野睦夫
佐藤 収

頭部外傷後、頸椎捻挫後などに頭痛、頭重など種々の愁訴を持つ患者の中に神経学的に特に異常所見なく、ただ低髄液圧を認めることがある。この外傷性と思われる低髄液圧症の治療に酸素気脳法が有効であり、しかも愁訴の軽快消失を認めることが最近注目された。

我々は過去2年間に当院外科で頭部外傷、頸椎捻挫の患者に検査の意味で酸素気脳法を施行した13例について髄液圧の変化、愁訴の変化について観察した。酸素気脳法施行前低髄液圧を認めた8例に関し、3例は正常髄液圧にもどり、2例は不変、3例は不明であった。愁訴に関して5例に著効、7例に有効であった。我々の症例は薬物治療など行なっているのが酸素気脳法単独の効果とは断定できない。今後積極的に症例を重ね検討してゆきたいと思う。

5. 乳癌の晩期再発

県立岐阜病院放射線科

奥 孝 行

初回治療から5年以上以降に出現する再発転移を晩期再発とすれば、乳癌においては晩期再発は全再発例の10%内外であり、他の悪性腫瘍に比較して多い。過去5年半の間に当科を訪れた乳癌患者106名の中、初回治療から第1再発まで5年以上経過していたものが4例

あった。最も短いもの5年、最も長いもの15年であり、2例は脳転移、全身撒布で死亡、他の2例は転移巣をもちながら生存しており、生存月数は13ヶ月から39ヶ月に及ぶ。

初回手術後8年目に肺転移を来した症例は、肺転移巣に⁶⁰Co照射を行ない、その3年後に大腿骨転移を来したが、この部にも、照射して、再発を来してから39ヶ月後の現在、生存中である。また初回手術から15年後に頸部、骨盤等に転移を来した症例は、再発を生じてから33ヶ月に死亡し、剖検において転移巣であることを確認したが、一般に生存期間は長いといえることができる。

6. 自然気胸を繰り返した Bleb の1例

岐大第一外科

小川 隆 司 安永 政 輝

馬場 英 逸

我々は最近20才男性で再三にわたって再発をくり返した自然気胸を術前、持続吸引にて排気、手術は、肺尖部の鷲卵大、ロート状の多房性の嚢腫の摘出を行い、治癒せしめた。従来肺結核が自然気胸の原因であると考えられていたが、最近ブラ又はブレブがその原因であるとする説が大勢を占める様になり、本症例を中心に、自然気胸の診断、病態、治療に関し、若干の文献的考察を加えて、報告した。

7. 肺過誤腫の2例について

国立療養所日野荘

松本守海 小林君美 加藤康夫

井上律子 清水慶彦 黒田良三

西尾駿伸

肺過誤腫は比較的古い肺良性腫瘍とされている。私もはすでに本症についての1手術例を“胸部外科”第17巻第6号で報告していますが、最近、左肺野に異常陰影を指摘されて、肺過誤腫の疑いで手術した症例、右下肺野に異常陰影を認め、肺癌の疑いで手術した症例の2例を経験しましたので、若干の文献的考察を加えて報告します。

8. 幼児ファロー四徴症の1治療例

岐大1外科

下野達宏 村瀬恭一 広瀬光男

症例は、12ヶ月の女児で、体重は7.5kgである。生後

3日目より全身のチアノーゼを認めた。Anoxic spellを時々来し、右室圧は、体血圧の74%である。

手術は、18°C単純超低体温、エーテル完全閉鎖麻酔下に、PSに対して肉柱切除と交連切開術を、VSDに対しては、直径13mmのパッチグラフトを当てた。遮断時間は、65分間であった。術後は、高温高湿酸素テントに収容した。術後低心拍出量症状群に対して、プロタノールを投与した。それ以後順調で、1ヶ月後全治退院した。

我々の単純超低体温麻酔は、心室細動、心蘇生、血流遮断時間等にそれ程困難性を感じる事なく、器具装置の簡略性、出血量の少い事、特に幼少児への適応性、術後経過安定性に加えて、完全な静止野で無血下開心術が可能であるという利点があった。

9. 新生児食道裂口ヘルニアの1治療例

岐大2外科

榎木良友 細野和久 国枝篤郎

最近我々は新生児食道裂口ヘルニアの1治療例を得たので若干の考察を加え報告した。

症例：生後8日目の男児、主訴は嘔吐。母親の妊娠分娩過程に異常なく、生下時体重は3380grであった。

現病歴：生後2日目より授乳を行なったが、授乳後30分程で嘔吐を来し、授乳不能となって小児科を受診。胸部単純レ線撮影にて胸腔内にガス像を認め、食道、胃造影により胃及び十二指腸の一部の胸腔内脱出が認められ本科を受診、直に手術を行った。

手術所見：手術はAllison法に準じた。左胸腔内には胸膜に被われた胃・十二指腸の一部が脱出し、左肺は上方へ軽度圧され、ヘルニア門は3横指を通じ得る食道裂口ヘルニアであった。由って胃・十二指腸を腹腔内に還納した後、ヘルニア門の左右両縁を縫縮し胸壁を一次的に閉鎖した。

術後経過は比較的順調で、術後21日目に退院した。

10. 最近1年間の急性腹部症について

松波病院外科

和田英一 松波英一 鬼束博哉

我々の病院で最近1年間の急性腹部症例、470例について述べ、併せてその特徴と若干の統計的考察を加えた。

11. 肝内胆石症の1例とその剖検所見

県立下呂温泉病院

鈴木貞夫 加藤正夫 安永政輝

症例 23才男 会社員

主訴 腹痛

既応歴 昭和39年胆石症として開腹術

現病歴 昭和44年6月22日 腹痛嘔吐来し7月25日本院外科入院。入院時眼球結膜軽度黄疸。白血球数14300 MG33, GOT42, GPT45, 尿蛋白(+) PSP 試験軽度障害, 昭和44年8月1日, 全麻下に開腹, 肝に肉眼的著変なく胆嚢癒着強く中等度腫脹し胆砂様抵抗あり総胆拡張し内に硬結触知す, 胆嚢切除, 総胆管内 T-tube 挿入手術終了, 昭和44年10月7日軽快退院。同年11月18日食欲不振, 腹痛来し再入院, 11月29日夜半より尿量減少12月1日死亡す。

剖検診断, 肝内胆石症, 肝膿瘍, 両側腎 ネフローゼ, 両肺ウッ血性肺水腫で, 死因は肺炎, ネフローゼであった。

12. 十二指腸カルチノイドの1例

岐阜市民病院外科

三 沢 恵 一

55才, 男子。約2ヶ月半前より, 軽度の心窩部痛があり, 胃腸透視にて, 十二指腸球部に陰影欠損を認め, 十二指腸ポリープの診断のもとに手術を行う。

全身所見, 及び, 一般臨床検査所見には, 特記すべきことなし。腫瘍は十二指腸起始部の前壁に存在し, ほぼ拇指頭大。腫瘍を被う粘膜の一部に小さい潰瘍あり。肝及び, リンパ腺への転移は認めず。手術は B.I 法にて胃切胃十二指腸吻合術を行なった。

腫瘍は, 組織学的にカルチノイドと判明し, 銀染色により, 腫瘍細胞の嗜銀性も認めた。

尚, 本症には, カルチノイド症候群は認められなかった。又, セロトニンの測定は行っていない。

13. 新生児持発性小腸穿孔の1例

大垣市民病院外科

森 直之 蜂須賀喜多男

森 直和 石川寛也 村瀬允也

田本果司 平松隼夫

症例は, 生後3日目の女子である。出産時体重は, 3000grであり, 主訴は, 腹部膨満である。出生2時間後より, 腹部膨満を生じ, 浣腸により少量の排便を見たが, 症状が増大する為に, 当院受診した, レ線検査

により, 遊離腹腔内ガス, 水面像を得たので, 穿孔性腹膜炎として, 開腹術を行なった。開腹してみると, 小腸下部に, 約直径3mm程度の穿孔があり, この部分を縫合閉鎖し, ドレーンを挿入して, 手術を終了した。術後は, 良好に経過し, 徐々に体重も増大し, 1ヶ月後, 全治退院した。この症例は, 穿孔部の癒着が強く, 充分の組織検索を行なえなかったが, 下部腸管の閉塞, その他, 原因不明で, 特発性に類するものである。合わせて, 若干の文献的考察をつけ加えて, 報告した。

15. 四肢動脈の慢性閉塞性疾患, とくに閉塞性動脈硬化症について

岐阜大第1外科(稲田潔教授)

岡田昭紀 松浦昭吉 鈴木 剛

昭和43年8月より45年1月迄に29例の四肢動脈の慢性閉塞性疾患を当教室に於いて, 入院治療したが, 内訳は閉塞性血栓性血管炎14例, 閉塞性動脈硬化症15例である。発症年齢では前者では30才台に好発し後者では50才台に於ける発病が圧倒的であった。女子の占める割合は前者にはなく, 後者にて3名のみであった。来院時の症状は閉塞性血栓性血管炎では間歇性跛行を訴えるものが約70%を占め, 閉塞性動脈硬化症にては50%であるが, その他比較的重篤な症状を呈するものが多かった。閉塞部位はそれぞれ末梢動脈に多いが, 閉塞性動脈硬化症では高位動脈の閉塞を来したものが30%弱, 存在した。上肢動脈の閉塞を来したものは閉塞性血栓性血管炎の2例のみであった。上記疾患に対し症状, 閉塞部位に応じそれぞれ胸部, 腰部交感神経切除術, 血栓内膜剥離術(トパッチングラフト)指趾肢切断を単独に, 或は併用して施行し大部分に満足すべき結果をおさめることができた。

16. 会陰部機傷

松波病院外科

和田 英 一 松波 英 一

会陰部機傷(impalement injury)は極めて稀な疾患であるが重篤な内臓損傷を併う事が多く注意して外科的観察を要する外傷である。

症例, 30才男子, 3米の穴に墜落しコンクリート鉄筋が臀部に刺った。受傷後ほとんど無症状に過したが, 6時間後急激に腹痛を来し来院した。会陰部に肛門7時の位置に肛門外口より3cm離れて直径1cmの小創面を認めた。開腹せるに膀胱並に小腸2ヶ所の穿孔を認めた。術後経過良好で全治した。